

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 山森真衣子

1. 学習成果について

今回の派遣に参加する以前から（長期の）留学を行いたいと考えていたが、今回の派遣を通してその思いが一層強くなった。その理由は以下の二点である。一点目は、国外にあることで自分と似た関心を持つ人々、自分と似たテーマを研究する人々と出会うことができるということが強く実感されたためである。日本だけを見ればいないような人々も、国外まで目を向ければ、いる可能性が格段に向上する。本派遣のおかげで、このことがただの理想論なのではなく実際にそうなのだと分かった。二点目は、今後研究を進めていくにあたって必要不可欠であるところの語学力（特に英語の能力）が否応無しにも向上するからだ。どの分野の研究もそうであろうが、日本語でコミットできる領域と英語でコミットできる領域は比較にならない。すなわち研究において英語の能力は不可欠である。本派遣のように、英語を使わざるをえない状況にあることで、その能力は向上するということが再認識された。

2. 海外での経験について

大学内では言語に関して困難を覚えることは少ない。ただし大学の外では非常に癖のある英語（シングリッシュ）が用いられることも少なくなく、また、英語を全く離せない人々もいる。そのためコミュニケーションに不安を感じることはゼロではない。しかし治安の良い国であるため、言語に関する不安が生命に関する不安に繋がることはほとんどないと言える。現地の人々は非常に親切、温厚であるため、道に迷ったりした場合も安全に復帰できる。物価であるが、学内や繁華街のフードコートは比較的安価であり、京都大学の学食と同程度である。ただし、多少スマートなレストランや酒や煙草といった嗜好品にあたるものは日本よりも高額である。総合的に考えると、物価は日本と同じか少し高い程度であろう。

3. プログラム内容

プログラムの内容は大きく二つである。一つ目は、心の哲学（philosophy of mind）のセミナーへの出席である。Jay Garfield 教授を始めとするシンガポール国立大学の教員六人が、一日一人トピックずつ講義をしてくれた。二つ目は、アジア哲学に関する三校合同カンファレンス（シンガポール国立大学、政治大学、京都大学）への出席である。京都大学からは私を含めて五名がプレゼンテーションを行った。また、これはプログラムには組み込まれていないが、セミナーの間をぬってカンファレンスの発表の合同練習を行った。

4. 進路への影響

アジア圏においても英語による高度で活発な議論が行われることを鑑み、哲学研究のための留学は欧米圏に限定されるべきではないということを実感できた。同時に、そのような活発な議論によりコミットするためにも、語学力の向上が早急の課題であると痛感させられた。